宮島プロジェクトに見るデータ活用

人を惹きつける地域づくり

地域創生Coデザイン研究所は、2022年10月、地域創生に取り組む人々が集い・学び・繋がる“地域創生Coデザインカレッジ こでざと”を開講。特別企画として「データ活用×コミュニティ」のウェビナーを開催。宮島での取り組み、関係人口づくりのデータ活用の重要性などを議論した。

トークセッションの様子。モデレーターは地域創生Coデザイン研究所の津田康太朗氏、SlalomのData & Analyticsコンサルタント 藤原理香氏

コロナ禍で気づいた関係人口の大切さ

津田　宮島は、観光客こそ増加しているものの人口の減少が進んでおり、一部は過疎地域に指定されています。厳島神社に近い中江（ちゅうえ）町において、地域に長期的に関与してくれる関係人口を増やすことをタスクに、ここにいる皆さんと一緒に活動に取り組んでいます。まずはそれぞれの自己紹介からお願いします。

藤原　宮島プロジェクトで地域創生Coデザイン研究所の支援に携わっています。

寺澤　2013年10月、元造幣局保養所をゲストハウスに改装し「宮島ゲストハウス三國屋」をオープンしました。コロナ前は海外客が9割を占めていたのですが、コロナ禍でパタリと止まってしまいました。米国人のグレースさんは滞在中にコロナ禍に巻き込まれそのまま三國屋で3カ月間滞在されました。彼女を囲んでの食事会や交流会が開かれ、宿泊客以外に地域の方も三國屋に来られる大きな変化が生まれ、関係人口の大切さに気づきました。

吉沢さんはもともとワーケーションの予定で三國屋にふらっと来られたのですがたまたま同い年だったこともあって意気投合し、40日ぐらい滞在して、移住を決められました。吉沢さんのスキルで中江町のホームページも作ってくれました。交流人口から関係人口になり、さらに永住人口になったケースです。今後は吉沢さんとともに多様な人が交流し合える場所づくりをめざして活動していきます。

吉沢　以前は東京で管理栄養士として働いていましたが、10年で4回転職し、適応障害で退職。その経験から会社勤務をあきらめフリーランスとなりました。当時は移住する気は全くなかったのですが、ワーケーションでたまたま三國屋さんに宿泊したことで人生が変わりました。40日の滞在中、寺澤さんが地域の方とつなげてくれたことで飲食店経営の話をいただき、移住を決意したのです。

このことから関係人口の増加で大切なのは、地域のハブになる存在と仕事につながる関係を作れる場所だと感じています。

今後は移住した側の立場から地域創生に取り組みたく、コワーキングカフェ「ミヤジマベース」を開きました。地域内外がつながるコミュニティと仕事の創出が目的の場所です。かつての私のように働き方で悩む人や起業を考える人の課題を解決し、仕事を生み出して関係人口につなげます。これまで出会った皆さんとともに、地域創生の拠点のひとつとして作り上げていきたいです。

データ活用で目標が明確になり、議論も活発に

津田　これまで中江町で関係人口候補をつなげるイベントや座談会を行ってきました。また、データを生かすべく、イベント時の人の流入の経路やSNSでどのような人が興味を持っているのかなどのデータを活用し、今後はつながった人と継続的につながっていくためにマルシェなどのイベントを活発にしていきたいと考えています。

宮島ゲストハウス三國屋マネージャー
寺澤潤哉 氏

コワーキングカフェ「ミヤジマベース」店主
起業支援「ベースカレッジ」主催 吉沢元太 氏

Snowflake株式会社 シニアプロダクトマーケティングマネージャー兼エヴァンジェリスト KT 氏

KT　データ分析のためのデータ分析になっておらず、関係人口を増やすというタスクを常に念頭に置いて活動されているところが素晴らしいと思います。

津田　次のステージとして、地域でデータリテラシーを向上するためのトレーニングや、宿泊施設の予約・運営管理システムのデータを活用した実証を行っています。トレーニングには、産官学の方々と、長期に関わっていただく可能性のある学生にも参加してもらいました。吉沢さんはトレーニングに参加していかがでしたか。

吉沢　参加するまではデータが地域創生にどのようにつながるのかイメージできませんでした。ところがデータを見ながら皆が話をすることで目標が一つになり、参加者の意見が活発になることを実感しました。データがあると話すテーマが決まり、やらなくて良いことも見えてくるので、無駄な議論をしなくて済む点もメリットです。

津田　実際にデータをもとにした活動を進めていく中で、中江町の飲食事業者さんが自分の店の課題を解決したいから勉強会に参加したいと声をかけていただき、どんどんつながりも広がっているところです。寺澤さんが参加されたグループからは実際にどのようなアイデアが出たのでしょうか。

寺澤　私たちのグループではTwitterの分析をしたのですが、1月に宮島で花火大会があったときは投稿数が伸びたのですが、はざまの日は少なかったので、投稿を促す発信が必要だと感じました。

津田　PMSの実証を受けた取り組みについては、次年度以降地域内でお金が回る仕組みづくりを考えていきます。例えば、ミヤジマベースに登録していただいた事業者さんと連携して地域のプロモーションをしていくといったことを考えています。

データ専門家の存在で速くなる事業スピード

藤原　おふたりはそれぞれのコミュニティをどのようにエコシステムにしていきたいと考えているのでしょうか。

寺澤　長期的にかかわってもらう人を増やすため学生にも参加してもらっているのですが、データを見て、学生たちからマルシェを自分たちで企画したいという意見が出てきました。地域創生に関わるプレイヤーはすごくやる気があって、いろんなことをやりたいと考えているのですが、思いが強く、多すぎて、時にめざす方向がぶれてしまうことがあります。それを冷静な視点で地域にとって良い活動なのかどうかを分析してくれるのがデータです。客観的な視点を提供いただける地域創生Coデザイン研究所さんはベストパートナーであり、いろいろな活動を一緒にしているところです。データを生かしながら仲間を募り、町を盛り上げていく活動を継続的に行っていきたいですね。

吉沢　コミュニティづくりを行っていくには4つの役割・特性を持つ人が必要だと考えます。経営企画・マーケティングを行う「戦略立案」、営業や現場スタッフを務める「事業推進・実務」、データサイエンティスト、メンターなどの「事実の分析・相談先」、専門人材の「戦略実行サポート」。今回の活動で、この4つの人材が揃うと事業が回ることを強く感じました。中でもデータ分析できる人が揃うと事業を回すスピードが圧倒的に速くなることを実感しています。こうした仕組みづくりにより仕事を創出し、宮島・広島の事業者さんと関係人口の候補の方をつないでいけるハブのような場所になっていければと考えています。

KT　おふたりの包容力、吸引力、推進力によって関係人口を増やすというタスクがしっかり遂行され、かつデータを有効に活用しながら取り組みを進められていることを実感できました。次は、皆さんの情熱を仕組み化できるよう、コアな部分を見極め、明文化し、だれでもがこの取り組みに携われるよう受け継いでいけるようにしてほしいと思います。 J

仲間とつくるデータドリブン文化

「データ活用×コミュニティ」で地域課題を解決

今回の基調講演では、データドリブン文化を推進する技術とビジョンを備えたリーダーを世に送り出したDATA Saberプログラムの創設者でもあるKT氏が講演。データ活用の極意を語った。

KT 氏（ケイティ）
Snowflake株式会社 シニアプロダクトマーケティングマネージャー兼エヴァンジェリスト

人、組織、データのコラボレーションがますます重要になる

Snowflake株式会社 シニアプロダクトマーケティングマネージャー兼エヴァンジェリストであるKT氏は、まず「データはリアルの世界を映す鏡」とデータの役割に触れたうえで、データ活用のプロセスは、はじめにタスクがあり、データを取って分析し、インサイトを得てアクションを起こし、またタスクに戻るというサイクルで進めていくことを説明。「常にタスクが何であり、行動変容を起こすためにデータを分析しているということを忘れてはならない」と心構えを述べた。

気候変動、人口減少、超高齢化社会、コロナパンデミック、そして戦争。突如訪れる予測不能な危機に立ち向かうためには「多様な主体が協力し合ってさまざまなアイデアを掛け合わせることが欠かせなくなっている」と述べ、そのための議論の土台として必要なさまざまなデータを含めた、人、組織、データのコラボレーションの重要性について言及した。例えば、飲食店はパンデミックによって従来の手法のみでは来店者数の予測ができなくなり、どれほど材料を仕入れればよいか見当がつかなくなってしまった。ただ、感染者数など外部のデータを掛け合わせることで予測はしやすくなる。米国のある企業は、Snowflake マーケットプレイスに載っている新型コロナ関連のデータを活用して、来店予測を行い仕入れの精度を高めることに成功した。「かつては困難だった外部データの取得が可能になった今、あとは皆さんがやるかやらないかだけ」と新たな段階にきていることを示した。

コミュニティ形成に必要なスキル、ビジョン、仕組み

KT氏は、地域創生を進めていく上でデータの活用と並んで重要なコミュニティの形成について次に触れた。ビジュアル分析プラットフォームのTableauは2013年に日本に進出したが、その後急速な勢いで、日本市場で普及した。前職でTableauに勤めていたKT氏は、Tableauを使う文化の醸成においてコミュニティの力が大きな役割を果たしたと考えている。

文化を作っていくための最初の1歩は「みんなで変えるんだと信念を持って熱狂する気持ち」と述べる。KT氏自身はまずTableauのミッション「お客さまがデータを見て理解できるように支援すること（We help people see and understand data）」に共感し、「この美しい世界が失われないように、みんなにどう伝えていくかを考えるようになった」という。

KT氏はまず、データドリブン文化を推進するスキルとビジョンを備えたリーダーを10人育て、コミュニティでつなぐことから始めた。2年半をかけて100人まで育て上げたが、さらにこのコミュニティを大きくしていくために次の代に引き継いでいく必要があると考えた。その実現には誰でも適用可能な仕組みと極めて属人的である情熱が双方高いレベルで継承されなければならないという。

データ活用を推進したいという情熱についてはすでに受け継がれていたため、仕組みについては、KT氏がそれまで取り組んできたことを明文化し、DATA Saberプログラムを創設。すると3年半で卒業生が1000人を超えた。この後、卒業生がさらに次の世代を育てる循環ができることによりその数は加速度的に上がっていくことが期待されている。

最後にKT氏は「とにかくまずは始めてみること。続けること。そして仲間とともに進んでいくこと。それができれば必ず大きく花開く」とエールを送った。 J

地域創生活動の実践知を磨き探求する場

課題解決に向けシナリオ作成 実践した修了生2人に聞く

2022年10月に開講した今回のプログラムは、「テーマ討議」、「講義」、「ゼミ」で構成され、全国4カ所でフィールドワークも実施。3月の最終講義では地域の課題解決に向けたシナリオを発表した。

仕事の責任を再認識
丹波篠山市役所 菅原将太氏

大阪から電車、車で1時間圏内に位置する丹波篠山市は黒豆の産地として知られ、今もしっかりした地域コミュニティが息づいている。一方、基幹産業である農業の担い手は減り続けており、暮らしと仕事を引き継ぐ人材の確保・育成が大きな課題だ。そこで、専門的なスキルを持つ企業に農村部の抱える課題解決にかかわってほしいと考え、「丹波篠山つながり案内所」を開設した。また、当地に多様なかたちで関わっている大学生や社会人も含め、関係人口を見える化する「第2住民票制度」の検討を進めている。

今回、「地域創生Coデザインカレッジ こでざと（以下、こでざと）」に参加したことによって、ふだん市役所で仕事をしていると出会えない方々と出会うことができた。地域の課題解決に関わりたいという企業の熱量も肌で感じることができ、期待していた通りだった。当市の歳入の約7割は国、県などからの財源が占めており、ステークホルダーである市外の人たちにも当市の価値をしっかり伝え、関わっていただく大切さにも気付いた。多様な人を巻き込み、地域を元気にできる地方公務員の仕事に誇りを持ちながら、大切に受け継がれてきた丹波篠山の豊かさ、魅力を守り続けていきたい。

枠を越えて人や社会をつなげる
「越境」コーディネーター 望月啓太郎氏

私自身、転勤の多い家庭に生まれ、氷河期世代でもあったため、働くこと、暮らすことに苦労した半生だった。のちに、東京でオフィスの運営に携わり働き方の変化を実感。働くこと、暮らすことがもっと自由になればと考え、福岡県福津市に移住しパラレルワークにチャレンジしている。地域での交流を通じて働く場所や働き方の選択肢が少ない現状を知り、「こでざと」で学んだことを活かし、地域内で雇用を創出することを目的とした市民団体を立ち上げたところだ。

これまでも地域創生、働き方に関する各種プログラムに参加しアンテナを張る中で「こでざと」に出会った。地域創生に関わる事業をスケールアップし、マネタイズさせ持続可能とするノウハウを身につけたいと考えていたが、新規事業の立ち上げ方、フィールドワークのやり方を体系的に学ぶことができた。途中経過や期待通りの成果が得られないケースも含め、地域創生のリアルな実態を知ることができたのは貴重だった。これまで接点のなかった自治体の方から聞けた生の声も参考にし、講義で学んだ「誰の何を解決するか」を意識しながら、地域の課題を解決していきたい。

3月の最終講義での集合写真

7月に第2期を開講

自治体や企業の方など地域創生に関わる多様な主体者が地域創生活動の実践知の習得、構想の具現化のために集い・学び・繋がり続けられる共創の場として、「地域創生Coデザインカレッジ こでざと」は、2023年7月には第2期の開講を予定している。 J

お問い合わせ

株式会社地域創生 Co デザイン研究所
地域創生 Co デザインカレッジ　こでざと事務局
codezato-inquiry@west.ntt.co.jp
https://codips.jp/